

Title	子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察
Author(s)	石川, 由美子
Citation	聖学院大学論叢, 22(1): 165-179
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=1800
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈研究ノート〉

子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す 「場」としての絵本についての一考察

石川 由美子

Consideration of Picture Book: Production of the *Zone of Proximal Development* and
Promotion of Cognitive Development in Children.

Yumiko ISHIKAWA

The picture book as medium is examined in this study. How does the picture book function as a medium between the child and the adult? This question was considered from 3 viewpoints: the structure of the picture book, the cognitive structure of the picture book, and the relationship of parent and child through picture books.

This study makes clear that, when a picture book is used by a child and an adult who has higher cognitive skills than the child, a restricted environment is created. This environment falls within an area which can be called the *zone of proximal development*: it promotes the child's cognitive development when parent and child are in this restricted environment.

Key words; picture book, *zone of proximal development*, cognitive development

はじめに

絵本とは何か。単にそう問われたら、そこには、文学、心理学、教育学など、さまざまな領域で、さまざまな答えが存在するであろう。本論考では、絵本を媒体としてとらえている。情報を与えるものとしての絵本、それは、常に情報の発信者と受信者の間にある（発信者及び受信者は常に同一ではなく、むしろ常に入れ替わる）。つまり、情報の発信者と受信者という、少なくとも二人以上の人の存在がなければ、その機能を発揮しないという前提に立っている。もちろん、発信者および受信者が情報を伝達し合うため、あるいは解読するために使用するシンボル、特に音声言語は、お互いの間で利用可能なものでなければならない。

執筆者の所属：人間福祉学部・児童学科

論文受理日 2009年7月13日

子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察

このような媒体としての機能をもつ絵本が、なぜ、大人同士の間では、ほとんど利用されないことがないのか、これは筆者の素朴な疑問であった。言いかえると、媒体としての絵本は、子どもと大人の間で利用されることで、その本来の役割を果たすということである。この点に、絵本の文化財としての重要な意味が隠されているのかもしれない。

発達の水準で考えれば、大人は子どもよりもその水準において優れた状態にあるといえる。優れた状態にある大人と、発達の途上にある子どもが絵本を媒体としたとき、どのような情報が大人から子どもに、子どもから大人に与えられるのであろうか。この点を解明することは、子どもが社会的な発達をどのように促進させていくのかという、子どもの発達過程を、絵本を通して明らかにすることでもある。そして、その過程を通して、絵本の定義がより明確となるのではないだろうか。絵本とは何か、その答えは決して、揺らぐことのない普遍的なものではない、と筆者は思っている。子どもの発達の水準に応じてまた、それをを用いる大人や子どもの知識や経験に応じて変動する、個別的でダイナミックな概念であると考えているのである。

媒体としての絵本は、情報の発信者と受信者が大人と子ども、その中でも発達段階の早期には、母と子である場合が多い。この2者の中で、絵本の何が認知され、利用されていくのか。つまり、絵本は、子どもあるいは母親にどのような情報を与えるために、文化的あるいは歴史的に、母子の養育環境に配置されてきたのか。この点に主眼をおき、子どもの発達の視点から、媒体としての絵本を深く掘り下げていきたいと考えている。そのためには、まず、絵本の静的な部分としての構造、すなわち、絵本を構成している構造の特徴（以下、絵本の構造とする）と絵本の認知的な構造についての知見が必要であろう。そこで、本論考では、絵本の構造、認知的構造に関する知見を述べた上で、絵本を媒介とした母子の認知活動についての知見を述べることにする。これらの知見から、子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す場としての絵本について考察を深めたいと考えている。

1. 絵本の構造

過去に、絵本の構造について、明確に記述した文献は見当たらない。しかし、絵と文字が対応しているものを絵本として扱ってきた、と述べているものがある（坂本、1977）。今さら、絵本の構造といわれても、それは、あまりにも当たり前のことであり、改めて説明するまでもないと思われるかも知れない。しかし、筆者は、その構造自体に絵本を媒体として認知する重要な要素が潜んでいると考えている。そこで、絵本の構造を物理的構造と表現構造に分け、物理的構造の上に表現された絵本の表現枠組み構造、表現形式、表現内容等を調査することで、絵本の構造を明確にすることを試みた（石川・石川、2004）。今回の報告では、絵本の構造を、絵本と類似性があると思われる媒体と比較する形で明確化することを試みた。

物理的な構造

絵本は一枚ずつ描かれた絵（文字を含むものもある）が複数枚、綴じこまれた形態をとる。この複数枚、ページが綴じこまれているという形態は、小説や学術書等の本、漫画などにもある。このページを綴じこむという文化的形態によって、これらの媒体には、最初のページから最後のページまでの間に必然的な順序関係が成立することとなった。そして、この文化的形態は、これらの媒体を利用した経験のあるものには、必ず、「開く」、「めくる」、「閉じる」という行為をアフォードすることとなる。この種の媒体の中で、乳児が初めて、「開く」と「始まり」、「めくる」と「続き」、「閉じる」と「終わる」という、因果的な関係を体験するのが、絵本である、といっても過言ではないであろう。

絵本と同じように複数枚からなるものに紙芝居がある。しかし、これは、3つの点で絵本とは、大きく異なる。第1は、規格の大きさの違いである。A3版ほどの厚画用紙に大きく描かれている紙芝居に対し、絵本では、大きいものでも見開きでA3版になる程度であり、明らかに紙芝居よりも小さい規格となっている。第2には、綴じ込まれていない、重ねあわされた順序関係であるという点である。そして最後は、絵と文が同じ面に描かれる絵本に対し、紙芝居は、絵の面の後ろに文を書くという表裏の構造となっている点である。この紙芝居の構造では、決して子ども自身が、「開く」、「めくる」、「閉じる」といった行為をすることはしない。また、描かれている絵の正面に子どもが位置することになり、絵本を介してのように、母子が向かい合ったり、絵本を前に一緒に並んだり、母の膝に抱っこされたり、などいろいろな配置が可能な絵本とは異なっている。つまり、紙芝居の構造は、初めから情報の送り手と受け手の役割を明確にする。しかし、絵本では、たとえ母親が情報の送り手の役割を担おうとしても、子どもがそれを望まなければ、子どもが絵本に対する行為の主導権を握ることで、情報の送り手となることもできるのである。

では、漫画の場合は絵本とどのように違うのか。絵本も漫画もページの構成がほとんどの場合、絵と文からなる。基本的には、絵本と漫画の構造上の違いはないのではないかと思う。しかし、あえて、大きく異なる点を上げるとすれば、漫画では1ページ内をコマ割にして、同一ページ内にいくつもの場面を描くという点がある。これに対し、絵本では、ほとんどが1ページ内に、主要場面を1つ描くのみである。そのため、漫画では、1ページの中にも順序関係が生じ、絵本よりも多くの情報をページ内に蓄えていることとなる。

抽象化

絵、絵カード、紙芝居、漫画などは、絵本と同様に3次元の対象を2次元に抽象化したものである。また、抽象画を除いては、なるべく具象的に描く点についても類似している。したがって、綴じ込まれているかいないか以外、抽象化の程度に大きな違いはないと考えられる。しかし、小説や学術書といった本は、ほとんどが文字のみで記述されている。これらの本は、抽象化の水準が絵本

とは大きく異なる。小説などのように、ページ内がほとんど記号（文字シンボル）で書かれている場合、対象を絵といったシンボルで描いたものよりも、1ページ内に詰め込まれた情報量のはるかに多くなる。

情報量

物理的な構造及び抽象化でも触れてきたように、情報量については、物理的構造と抽象された程度に、大きく関わる。情報の質といった点を除けば、情報量について、まとめると、絵、絵カード<絵本=紙芝居<漫画<小説、学術書等の順で多くなると考えられた。

母子活動と絵本の構造

絵本の構造を物理的な構造、抽象化、情報量の視点から、他の類似した媒体と比較する形で検討してきた。その結果、乳児期の早期より、母と子の間の媒体として、絵本が選択されやすい理由がある程度、明らかとなったと思われる。

絵本と類似した点がある媒体の中で、情報の送り手、受け手といった二人以上の存在が必要なのは、絵カード（絵）、絵本、紙芝居までであろう。漫画、小説等になると基本的には、媒体から情報を受け取る、受け手のみが存在すれば、媒体としての機能が発揮される。この違いは何から生じるのであろうか。筆者は、大人と発達の水準が異なる、子どもの発達に関連すると考えている。

例えば、子どもが大人と同じ発達水準なのであれば、初めから、多くの情報量を扱える小説等でもかまわないはずである。ところが、発達の途上にある子ども、特に乳幼児である場合、それが無理なのは、文字という記号自体を乳幼児がまだ学習できていないこと、記号化されたことで詰め込みが可能となった莫大な情報量を処理するための、認知的な発達が遂げられていないなどの理由があるであろう。もちろん、情報の内容を理解するための、知識や経験も不足している。漫画はというと、絵の抽象化は絵本と同程度でも、やはり、情報量の多さと、漫画に表現されている内容を理解する、知識や経験が、乳幼児では不足している。

小説や漫画などより、格段に情報量が少ない、紙芝居や絵本はどうであろうか。情報量についても、抽象度についても同程度の水準にある、これらの媒体は、どちらも乳幼児にとって、他に比べ、理解しやすいものであるのは確かであろう。しかし、それでも、乳幼児のみで理解できるものではなく、大人の援助が必要となる。その際、媒体自体の規格、構造などの特徴から、絵本の方が、大人と子どものやりとりが生じやすい環境を作り出すのは先に述べたとおりである。つまり、情報の送り手および受け手としてお互いが役割交代しやすい環境を作り上げる。このことが、発達水準の優れた大人から、発達途上の子どもへ、媒体を通して、知識を伝達しやすい環境を生むのではないかと思う。つまり、絵本が母子活動の環境に置かれるということだけで、絵本という媒体に制約された、母子活動のルーティンが生じるということである。そして、その母子活動こそが、Vygotsky

子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察

(1978) のいう最近接発達領域を開発する教授過程と同義となると考えられた。

2. 絵本の認知的構造

絵本を媒介とした母子活動のルーティンの中で、子どもは、ある時期より、絵本には意味があると気づく。そして、その意味を理解しようと努力し始める。

この時の意味とは、どんなものなのであろうか。

岡本 (1999) は、意味には、記号的意味と存在的 (または行為的) 意味があると述べた。記号的意味は、記号による指示的關係を中心とした意味であり、存在的 (または行為的) 意味とは、行為や存在にこめられている機能的価値や意図、動機、目的、理由、根拠、価値、それらがもたらす心的内容等を問う場合であるとした。絵本を介して得られる意味にも、同様のことが言えるのではないかと思う。つまり、絵本の認知的な構造を理解する上でも、意味ということばが表すものを明確にする必要があると思われた。そこで、ここでは、「絵本とはどのようなものなのか」、ということを知る部分 (存在的あるいは行為的意味) と、絵や文 (あるいは単語) というシンボル (記号) が指示する対象や心理表象との対応関係 (記号的意味) に分けて、絵本の認知的 (意味的) 構造を論じる必要があると考えた。また、筆者としては、ここにもう一つの意味として、情動的な認知 (意味) 構造というものを付け加えたいと考えている。

絵本の存在的 (または行為的) 認知 (意味) 構造

Mayer (1983) は、物語の認知構造に対する言及の中で、「個人が意味を理解しようと努力するとき、物語からその構造を獲得しやすい」と述べている。この場合は、後述する記号的な認知 (意味) 構造をさしているが、存在的 (または行為的) 認知 (意味) 構造についても同様に、絵本に対する個人の意図的な活動によって、知見が得られるのではないかと考えている。しかし、絵本に関しては、存在的な認知 (意味) 構造に関する知見を述べた研究は、ほとんどないのが現状である。筆者は、存在的な認知 (意味) 構造に関して、1つの考えを持っている。それは、この認知構造と、絵本の物理的構造との関連である。物理的な構造の項でもふれたように、複数ページが綴じられている構造を持つ絵本は、「開く」、「めくる」、「閉じる」という行為をアフォードする。そしてこの行為により、「開く」と「始まり」、「めくる」と「続き」、「閉じる」と終わるといふ、乳幼児の絵本に対する認知が獲得される。これは、存在的認知 (意味) 構造の例と考えられる。このように、絵本で生じる認知構造は、記号的認知構造だけではない。石川 (2009) は、めくる行為の存在的意味についての報告をしているが、今後、更なる研究が必要であろう。

絵本の記号的認知構造

石川（1998）は、複数ページからなる絵本について、先行するページと後続するページの内容的な関連について、分析した。その中で、最も単純なタイプの絵本には、あるカテゴリに入る対象を、1ページごとに描いただけのものがあることを報告している。例えば、くだものを例にすると、リンゴ、みかん、なし、……といったように、くだものという基準以外は、何の因果関係も存在しない対象が1ページごとに描かれているようなタイプの本である。このような最も単純な形態からなる絵本は、乳幼児が、対象を抽象化できれば、利用することが可能となると考えられる。つまり、絵をシンボルと捉え、そのシンボルを情報（刺激）として選択し、対象の表象が想起されればよい。遅くても、9～12ヶ月の月齢の間で、シンボルとして絵を認知できる（Moerk, 1985）という報告をあわせて考えると、乳児期のかなり早期より、単純なタイプの絵本は利用可能となる。まとめると、絵本の絵は、シンボル（意味するもの）として、子どもにその対象の表象（意味されるもの）を想起させる構造を備えていることになる。

加えて、このような単純なタイプの絵本でさえも、母子活動で利用されるときには、シンボルとしての絵に、母親の音声言語が随伴するのが常であろう。くだものの絵本の例でいえば、絵のりんご（シンボル）に対して「リンゴ」という音声（コトバシンボルあるいはコトバ記号）が対応する。この結果、乳幼児は、「リンゴ」という音声を情報（刺激）として選択し、りんごの表象を想起し、シンボルとしてのりんご（絵）と照合することが可能となる。すなわち、「リンゴ」（コトバシンボルあるいはコトバ記号：意味するもの）とりんご（シンボル：意味されるもの）を確立する構造も備えていると考えられる。

しかし、絵本の形態は、このような単純なものばかりではない。大抵の絵本が絵とともに文字（単語、文、文章）を伴う構造となっている。つまり、りんご（絵：シンボル）と林檎（文字シンボルあるいは文字記号）が、1ページ内に配置されている形態をとる。このことによって、乳幼児が、りんご（絵：シンボル；意味するもの）と林檎（文字シンボルあるいは文字記号；意味されるもの）を結びつけるためには、少なくとも2通りの方略が考えられる。1つは、リンゴという音韻表象をすでに子どもがもっている場合である。リンゴ（絵：シンボル；意味するもの）を乳幼児が情報（刺激）として受け取り、「リンゴ」という音韻表象を想起させ、林檎（文字シンボルあるいは文字記号；意味されるもの）と対応させる場合である。もう一つは、情報を受け取った後、子どもが自力では音韻表象を想起させることができないが、母親の音声（コトバシンボルあるいはコトバ記号）を聞いて、林檎（文字シンボルあるいは記号）と対応させることができる場合である。このように、絵本は、絵（シンボル）と文字（シンボル記号）が1ページ内に描かれているために、能記一所記関係を拡張させていく構造をもつと考えられた。そして、そこには、子どもの発達の水準が大きく関わる。

絵本の認知構造を論ずるとき、もう1つ触れておかなければならない点がある。それは、絵本に

も、物語文法といわれるような構造が存在するのということである。先に引用した Mayer (1983) は、まさにこの点について述べている。物語の内的構造については、1970年代から多くの研究者によって紹介されているので、詳しくはそちらを参照されたい (Thorndyke, 1977; Mandler & Johnson, 1977)。石川 (1998) は、100あまりの絵本を分類し、そのカテゴリから代表的な絵本を抽出し、Thorndyke (1977) の物語文法規則に当てはめ、絵本の認知構造を検討している。その結果、「場面設定」—「テーマ」—「プロット」—「解決」という物語の文法規則を、すべての絵本が備えているわけではないことを明らかにした。また、発達水準の異なる子どもがよく読む本を調査した研究では、発達の水準が上がるにつれて、絵本の形式が複雑になることを報告している (手塚, 秋庭, 安藤, 岩原, 小池, 中村, 1981)。これらのことを考え合わせると、絵本には、物語文法規則に匹敵するほどの、普遍的な記号的認知構造は存在しないということになる。それにもかかわらず、筆者は、絵本が、意味内容を理解する上で、重要となる記号的認知構造をもっていない、とは考えていない。ページ内、あるいはページ間に上手に割り当てられた意味内容が、乳幼児の、意味を理解するための認知構造として働くと考えている。例として、神沢利子 (文)、柳生弦一郎 (絵) 作の「たまごのあかちゃん」を挙げて説明する。

1 場面：たまごの中にかくれんぼしている赤ちゃん出ておいでよ [たまごの絵]

2 場面：(びっぴっぴっ)* こんにちは (にわとり)* の赤ちゃんこんにちは [生まれた赤ちゃんの絵]

「たまごのあかちゃん」は、基本的には、上記の2場面が5回、繰り返される構造となっている (* 括弧内の泣き声と、動物は、変化する)。最初のページが、「……赤ちゃん出ておいでよ」という呼びかけで終わり、次のページを「めくる」と、たまごから生まれた赤ちゃんが描かれている。つまり、この絵本は、絵本の物理的な構造を利用し、絵と文によって、「たまご—生まれる」関係のパターンを産出している。このような絵本の認知構造が、次に何が起こるのかを、子どもに予測させるための、記憶の道具となっていると考えられるのである。

Pavio (1969) は、名詞 (刺激項) と形容詞 (反応項) を組み合わせた連合学習の実験において、刺激項としておかれた名詞が、「とめ金: Peg」の機能を果たし、反応項の想起に影響するという報告をした。「たまごのあかちゃん」にみられる、認知構造はまさに、先行ページが刺激項であり、後続ページが反応項に一致する。Pavio (1969) はまた、具象名詞は知覚可能な指示対象とあらかじめ連合しているから、抽象名詞よりも容易にイメージを喚起する、とも述べている。絵本の絵は、対象を抽象化しただけのものであることを考えると、言語発達が未熟である乳幼児には、具象名詞よりもイメージを、さらに喚起しやすいものであろう。したがって、絵本の認知構造もまた、絵本の構造自体を抜きに考えることができなれないと思われる。この点に関しては、石川・石川 (2002) で詳細な検討がなされている。

情動的な認知（意味）構造

存在的（または行為的）認知（意味）構造および記号的認知（意味）構造を分けて考えることに異論はなかったが、どうしても、もう一つの認知構造を加えたいと思った。なぜなら、絵本には、文字などの記号が一定の規則で表す形式通りの意味以外に、絵で表現された部分には、特に、情動を想起させるような認知構造が含まれているのではないかと思われたからである。基本的に、絵と文が対応するように配置されている絵本では、記号的な意味と情動的な意味は一致していることが多いと思われる。しかし、情報を選択的に受け取り、意味づけるのは、個人であることを考えると、情動的な意味が記号的な意味と合わない場合も生じてくると考えられる。また、山鳥（1998）は、言語は状況の中で発せられるとして、情報の送り手と受け手がどのような状況にあるかで、意味の認知が変化することを指摘している。絵本を読むという状況で、母親自身が、絵本から選択的に受け取った情報を意味づけ、そのメッセージを音声言語にのせて子どもに発したら、絵本における意味の伝達はもっと複雑になるのではないかと思われる。泰羅（2009）は、読み聞かせの最中に子どもの脳の働きを調べ、大脳辺縁系の働きが活発になることを明らかにした。つまり、絵本をみているときの子どもが情動を活発に働かせていることを示したのである。

子どものイメージについて岡本（2005）は、個人的経験から出発するものであり、きわめて主観的であるが、大人のイメージに比べて、行動に根ざし、情動・感情に彩られていると述べている。現実の知覚体験で生じた情動的な覚醒は、イメージ獲得と保持のための1要因として作用すると考えられる。

絵と文からなり、視覚的な表象を想起しやすいという特徴をもつ絵本では、意味理解に、かなり情動が関与すると考えられる。これらの知見を踏まえて、絵本での情動的な認知（意味）構造を明らかにする研究はまだない。

3. 母—絵本—子どもの認知活動

生まれる以前からかもしれないが、少なくとも生後まもなくより、母子の間でコミュニケーションが開始される。初めは、母親からの一方的な情報の発信かもしれないが、次第に子どもから、何らかの応答がみられるようになる。また、母親は、子どもの泣き声や、動き等を、状況に合わせて意味づけ、対応することを始める。この結果、初めは無意味であった子どもの行動が、ある状況の中で意味をもつことを、子ども自身が認知する。そして、子どもは、必要であると自覚したとき、自発的にその行動を母親に向けて行うようになるであろう。このような、コミュニケーションが、乳幼児早期の子どもと母親の間で、繰り返され、子どもは次第に現象を意味づける（表象する）力をもつようになると考えられる。ここでは、このような母子の関係性の基盤上に、絵本を媒介物として利用するようになった場合、どのような活動が生じるようになるのか。また、その母子活動に

影響する要因はあるのかなど、いくつかの知見を交えながら述べてみたい。

コミュニケーション媒体としての絵本

絵本の認知的構造の部分でも述べたように、絵本は、対象を抽象化できる能力がなければ、利用が難しい側面がある。したがって、いくら、母子の養育環境に絵本が配置されていたとしても、生後すぐに利用できるわけではない。また、母親もそれを望んではない。常識的な事柄のようだが、絵本を利用できるようになるためには、絵本を利用できない間の親子のやりとりが、かなり重要なのではないかと筆者は考えている。しかし、残念ながら、この移行時期について述べた知見はない。たとえ、母子であっても、生後すぐからしばらくの間は、お互いどのようにコミュニケーションしていけばいいのかを学習しあうと思われる。例えば、相手の注意をひきつけることを考えてみる。母親は、子どもを正面に抱き、視線を合わせるようにする。そして、「ベロベロバー」とやりだすかもしれない。子どもは、ただ泣くだけかもしれない。親と子どもでは、注意を引くために用いる手段が、はじめは全く異なる。しかし、次第に、相手を使う言語的、非言語的手段を理解し合うようになり、子どもにおいては最終的に、母親が用いる手段を自ら利用するようになる。岡本（1999）は、このようなやりとりをシグナリングと呼んでいる。このような2項関係の中で、獲得された言語的、非言語的スキルが、絵本を用いる上でも、重要な道具となるのではないかと推察するのである。

絵本を利用するための準備段階が整った母子は、ついに、絵本の認知構造に触れることになる。絵本での母子活動は、無制限に広がっていくものではなく、絵本の存在的認知構造や記号的認知構造によって、制限を受けると考えられる。このことが、乳幼児にとって、利用しやすい環境を整える要因になると考えられる。

フォーマットとルーティン

絵本を題材にして、母子活動を研究するものの多くが、この概念をもとにしているといっても過言ではない。石川・前川（2000）が、これらの概念について、詳細なレビューを行っているため、ここでは、概要のみを紹介する。

Ninio & Bruner (1978) は、母親と子どもの読み場面の対話サイクルを分析し、母親の絵本の読みスタイルには標準行為フォーマット（注意を引く・質問・命名・フィードバック）が存在することを報告した。そして、この絵本場面で用いられたフォーマットは、他の場面で用いられるフォーマットよりも、言語教授の機能が働くことを指摘した。その後、Ninio (1983) は、合同注意後のフォーマットを語彙教授フォーマットと名づけ、絵本の活動で生じるフォーマットが、子どもの語彙獲得に大きく影響することを、さらに、強調した。一方、Snow と共同研究者たちの一連の研究では、絵本の読み場面で生じる繰り返しに焦点をあてた報告を行っている (Snow & Goldfield, 1982; Snow,

Dubber, & Blauw, 1982; Snow & Goldfield, 1983)。この繰り返しには、同じ本が繰り返し活動に用いられるということ、その用いられた本を介して、母子の対話がパターン化されることが含まれ、これによって、言語習得が促進されるとした。この説明のためにルーティンという用語を用いている。

このように絵本を媒介とした母子活動では、母子の間に特定のコミュニケーションパターンが生じ、このことを表す説明概念として、フォーマットおよびルーティンという用語が用いられた。したがって、基本的にはフォーマットおよびルーティンは同一の概念である。重要なのは、母子のやりとりに絵本を媒介させることで、上述のようにパターン化された認知活動が生じるという事実である。また、フォーマットやルーティンは、言語のパターン化に力を注いでいるが、絵本を介した活動では、非言語的な認知的活動のパターンも生じるはずである。この点についても、検討を深めていかななくてはならないと考えられる。しかし、このようなパターン化された認知活動は、常に普遍的であるわけではない。親の活動の役割を、いつのまにか子どもが行っていたり、パターンが長く複雑になっていたり、といった変化が生じることが報告されている（石崎, 1996; Snow & Goldfield, 1983; Minami, 1999; 小山, 1982; 辰野・斎藤・武井・荻野・大浜, 1981)。この変化は、子どもの発達の促進とともに生じると考えられるが、その詳細な説明は、まだなされていない。

絵本に対する大人の期待

絵本を介した母子の認知活動は、絵本に大きく影響されることは、先に述べたとおりである。それに加えて、絵本を子どもに利用しようとする、大人の絵本への期待もまた影響すると考えられた。そこで、ここでは、絵本に対して大人が持つ期待についての知見をまとめる。

絵本は、絵の直感性を利用して環境にある事物や現象のイメージを子どもに与える。これによって文学の世界に接近させる通路としての意味を絵本が持つようになったと坂本（1977）は述べている。つまり、言語で表現される芸術作品の世界への橋渡し機能を、絵本が有していることを示唆したといえる。ところで、芸術作品には鑑賞するという動詞がたびたび使用される。この鑑賞するとは、芸術作品に接して、味わい理解することという意味がある。子どもが、味わい理解するためには、単に言語という記号を理解したということではとどまらない何かがあるように感ずる。記号を通して生じる共感や自己との対話の世界がなければならないだろう。

石川・石川（2001）は、保育学生を対象に調査を行った。学生が保育場面で教材として提供する絵本や図画工作が子どもの発達にどのように影響すると思うかを自由記述してもらった。その結果、絵本に学生が期待するものと、図画工作に期待するものが異なることが認められた。絵本には想像力を養うこと、思いやりや他者の気持ちを理解することなどの情緒の発達を期待することが示された。また、保育者に対する調査では、絵本を介して子どもに、情緒を豊かにする・夢や想像を与える・基本的習慣が身につく・文字や言葉を覚える・観察力や思考力が高まる・知識を与える・

子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察

将来の読書の基礎を作るなどを期待していることが示された(神谷, 1987)。読み聞かせに対する母親の考えについての調査では、空想・ふれあいなど読み聞かせの過程に関わる項目を重視する母親や、本好き・楽しむなどの感情的側面を重視している母親が多いことが示された(秋田・無藤, 1996)。

保育学生、保育者、母親と子どもに対する立場が違う大人の調査であっても、絵本を通して、想像性といった側面や情緒の豊かさを求める側面は共通していた。子どもが言語で表現される芸術作品を味わい楽しめるようになるには、絵本にこめられた想像性や情緒性の世界を理解するための知識を、大人との活動を通して学習しなければならない。

絵本に対する子どもの反応

大人の絵本に対する期待が、母子の認知活動に影響するなら、当然、子どもの絵本に対する期待も、認知活動に影響するであろう。しかし、子どもが絵本に何を期待しているのかという視点から行われた研究は、ほとんどない。乳幼児期の子どもが絵本に抱く期待を、言語化された形で調査するのは、かなり困難が伴うためもあるだろう。ただし、子どもの絵本に対する反応を分析しようとした研究はいくつか認められた。しかし、結果は、多様であった(山口・寺山, 1995; 流王・北江・大森・流王, 1992; 沢田・田代・小林・高木, 1973; 高木・小林・田代・沢田, 1974)。

子どもがコミュニケーション媒体としての絵本から何を感じ、学んでいくのか、特に、大人が期待するような、想像性や情緒性を、絵本を通じて子どもは獲得できるのか。子どもの反応を観察、分析することで、この点を明らかにする方法の開発もまた、今後必要であろうと思われる。

総合的考察

本論考では、絵本の構造、絵本の認知的構造、そして絵本を媒介とした母子の認知活動についての知見を述べてきた。ここでは3つの視点についての概要をまとめながら考察を深める。

絵本の構造においては、物理的構造、抽象化、情報量、などを紙芝居、漫画など他の媒体との比較を通して、その構造特徴を明らかにした。

ページが閉じこまれページ間に順序関係が成立する物理的構造をもつ媒体には、絵本以外にも漫画、小説、学術書などがある。これらの媒体は情報量、抽象化の程度とも絵本よりも高度化されている。そのため、文字などのシンボルを利用できない乳幼児期の子どもには理解できない。一方で絵本は、子どもの発達水準に合わせるかのように多様である。

紙芝居は、情報量としては絵本と同程度と考えられるが、その物理的構造は異なる。紙芝居は、綴じこまれていない順序関係であり、文と絵が同一ページではなく表裏に描かれた構造をもつ。この構造から、紙芝居は、絵本よりも情報の発信者が固定される。家庭において紙芝居が普及しないのは、その規格の大きさだけでなく、情報の送り手と受け手を入れ替えながらやりとりを楽しむ母

子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察

子活動を誘発しにくいことが影響しているのであろう。漫画、小説、学術書と異なり絵本、紙芝居は、初めから二人以上の人間の間で利用されることが想定されている媒体である。その中でも絵本は、ここで比較した他の媒体よりも、情報の発信者と受信者が流動化しやすい。発達の優れた大人と発達途上である子どもという、発達の水準の異なる二者間で、情報の発信者と受信者の役割を状況に応じて変えることで、絵本からの情報を伝わりやすくする構造特徴がある。つまり、絵本は、その構造に状況に応じて情報の送り手と受け手を入れ替える母子活動をアフォードする、文化・歴史の意味を持つ媒体なのである。

絵本の認知構造においては、絵本の意味を子どもがどのように理解するのかについて、意味を存在（行為）的認知（意味）構造、記号的認知（意味）構造、情動的認知（意味）構造について操作的に分けて論じた。絵本の認知構造は、「めくる」「開く」「閉じる」などの存在的意味についても、能記—所記関係や物語構造理解などの記号的意味についても、さらに、言語や絵を刺激として想起される情動的意味についても、絵本の物理的な構造が基盤になることが明らかとなった。これまで、認知的発達に関する意味の研究は、言語の記号的認知（意味）構造を中心に行われ、存在的な構造（意味）を重視して来なかった（岡本, 1999）。絵本を介した子どもの認知発達を研究する場合においても、記号的認知（意味）構造の検討はもちろんであるが、今後、存在的認知（意味）構造や情動的認知（意味）構造に関する研究を進めていくことが肝要であろう。石川（2009）は、母子の読み活動を分析する中で、めくる行為の存在的意味についての報告を行っている。このような絵本の存在的認知（意味）構造を検討する研究の知見がさらに期待される。また、絵本を介して伝達される情動的な意味の研究は、まだほとんど着手されていない。絵本は文字、文のみならず絵というもので構成されていることを考えると、絵と子どもの情動的認知の関係を読み解くことは、特に重要課題となる。

絵本を媒介とした母子の認知活動においても、絵本の構造および認知構造が、母子活動のルーティン化を生じさせる環境を作り出すことが示された。また、大人が絵本に対して抱く期待は、絵本に特有なものであることもわかってきた。これらのことから、絵本を媒介とした母子の活動は、無制限に広がるものではなく、絵本という制約の中であるからこそ、より効率的に子どもの発達を促す。絵本という制約環境を吟味した上で、母子活動のルーティン化現象をとらえなおした時、その活動から生じる言語および非言語のパターンとその複雑化の過程は、子どもの社会的な発達過程を知る上での重要な知見となると考えられる。

石川ら（1996）は発達水準の異なる子どもと母親の間で行われる絵本を介した認知活動が、子どもどのような発達と連関するのかについてオーダリングアナリシス（Airasian & Bart, 1975）という手法を使って研究を進めてきている。この知見からは、絵本を子どもが利用できるようになるためには、どのような発達がなされる必要があるのかを知ることができる。つまり、絵本を子どもの認知発達支援として効果的に利用する可能性がこの知見から啓かれる。発達が遅れている、発達

の順序性に問題が生じている、などの発達の問題に、絵本を媒介とした自然な文脈での読み活動からの支援が可能となる。このような視点での研究もさらに検討する必要があるだろう。

本論考で検討された3つの観点は、絵本という媒体と子どもの認知発達の関連をさらに検討していく上で重要な観点であること、また、絵本という媒体が子どもの認知発達を促す最近接発達領域という「場」となることをある程度、明確に示したと思われる。絵本を介した母子活動で、絵本からどのような情報が伝達されるのかを考える時、絵本の構造（物理的構造および表現構造）を抜きに考えることはできない。その構造が、情報を適切に伝達するための制約環境を作り出し、そこで、やりとりをする母子それぞれの行為をアフォードする、この制約環境での活動こそが、子どもの認知発達を促す最近接発達領域と考えられるのである。泰羅（2009）は、母親が読み聞かせの最中に脳の前頭連合野の機能を活発化させることを明らかにした。この部位は、人とのコミュニケーションで活発となり、相手に共感する、相手の気持ちになって考えるときに特に顕著に働くと述べている。つまり、読み聞かせの活動中に母親は、物語の登場人物の感情描写や、絵本をみている子どもの気持ちを読み取りながら活動している。一方で、前述したように、子どもは活動中に、情動を働かせていることになる。泰羅は、この点から、母親が相手の気持ちに強く訴えかけようとしているのであるから、子どもたちの情動に関係する脳の機能が働くのではないかという仮説を立てていた。絵本についていくつかの観点から検討してきた筆者としては、この知見を受けてまだ、詳細にしていかなければならない点が多く残されていると考えている。例えば、実験に参加した5人の子どもの年齢は明らかにされていなかったが、計算が可能ということから比較的年齢の高い子どもと推測される。絵本が利用可能な低年齢の子と母の活動ではどうなのか、また、絵本の言語の視点に焦点を当てているが、絵についての言及がない点に関してはどう考えるのかなど、さらに明らかにしていく必要があると考えられたのである。

以上を踏まえ、今後は、絵本を通して、絵本を大人と子どもの間で利用する道具として存在させてきた、人間の文化・歴史的発達を読み解いて行きたいと考えている、また、発達の水準の異なる大人と子どもの間で絵本が心理的道具として利用される過程で、どのような子どもの認知発達が獲得されていくのか、この点を人間の活動という点から明らかにしたいと考えている。

文 献

- Airasian, P. W., & Bart, W. M. (1975). Validating a priori instruction hierarchies. *Journal of Education measurement*, 12, 163-173.
- 秋田喜代美・無藤隆 (1996). 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の研究. *教育心理学研究*, 44, 109-120.
- 石川由美子・前川久男 (1996). 絵本理解とその発達順序性—発達援助としての絵本利用の基礎研究一, *心身障害学研究*, 20, 83-91.
- 石川由美子 (1998). 絵本の構造特徴：子どもは絵本理解に物語スキーマを利用するのか？ 筑波大学医療技術短期大学部研究報告, 19, 61-69.
- 石川由美子・前川久男 (2000). 絵本を媒介とした母親と子どもの読み活動に関する研究の動向. *心身*

- 障害学研究 (筑波大学心身障害学系), 24, 227-240.
- 石川隆・石川由美子 (2001). 保育資源と子どもの発達. 発達科学研究 (宮城学院女子大学附属発達科学研究所), 1, 1-6.
- 石川由美子・石川隆 (2004). 絵本の構造—物理的構造と表現構造—, 4, 41-49.
- 石川由美子 (2009). 絵本を媒介とした母子活動と子どもの発達—「めくる」行為の存在的 (行為的) 意味について—, 日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集, 428.
- 石崎理恵 (1996). 絵本場面における母親と子どもの対話分析. 発達心理学研究, 7(1), 1-11.
- 神谷圭子 (1987). 幼児にみられる絵本の自発的選択傾向 (その 2). 第 40 回日本保育学会発表論文集, 558-559.
- 小山正 (1982). 乳児の象徴機能の発達に関する研究 (I): 絵本場面における指差しの発声について. 大阪教育大学障害児教育研究紀要, (5), 151-162.
- Mandler, J. M., & Johnson, N. S. (1977). Remembrance of things Parsed: Story structure and Recall. *Cognitive Psychology*, 9, 115-151.
- Mayer, R. E. (1983). Can you repeat that? Qualitative and quantitative effects of repetition and advance organization on learning from science prose. *Journal of Educational Psychology*, 75, 40-49.
- Minami, M. (1999). Book-reading styles of Japanese mother. JCHAT 言語科学研究会, 第 1 回大会予稿集, 61-63.
- Moerk, E. L. (1985). Picture-book reading by mother and children and its impact language upon development. *Journal of Pragmatics*, 9, 547-566.
- 村瀬俊樹・マユアキ・小椋たみ子・山下由紀恵・Dale, P. (1998). 絵本場面における母親の会話: ラベリングに関する発話連鎖の分析. 発達心理学研究, 9, 2, 142-154.
- 三宅信一・清水貞夫・及川克紀 (1985). Ordering theory の諸手法の比較(3) 仮想データによる検討. いわき短期大学紀要, 180-190.
- Ninio, A., & Bruner, J. (1978). The achievement and antecedent of labeling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.
- Ninio, A. (1983). Joint book reading as multiple vocabulary acquisition Device. *Developmental Psychology*, 19 (3), 445-451.
- 岡本夏木 (1999). 言語発達研究を問い直す, 141-201. 中島誠・村井潤一 (編), ことばと認知の発達 (シリーズ人間の発達), 東京大学出版会.
- 岡本夏木 (2002). 幼児期—子どもは世界をどうつかむか—, 岩波新書.
- Pavio, A. (1969). Mental imagery in associative learning and memory. *psychological Review*, 76-241-263.
- 流王農・北江紀子・大森順子・流王弘子 (1992). 保育園における絵本研究 2. 第 45 回日本保育学会発表論文集, 288-289.
- 坂本一郎. (1977). 絵本の研究. 日本文化科学社.
- 沢田瑞也・田代康子・小林幸子・高木和子 (1973). 絵本のおもしろさの分析: 内容の分析と読み聞かせ中の反応を中心として. *読書科学*, 17(34), 81-93.
- Snow, C. E., & Goldfield, B. A. (1982). Building stories: The emergence of information structures from conversation. Deborah, T. (Ed.), *Analyzing Discourse: Text and Talk*. Georgetown University Press, Washington, D. C., 127-141.
- Snow, C. E., & Goldfield, B. A. (1983). Turn the page: Situation — specific language acquisition. *Journal of Child Language*, 10, 551-569.
- Snow, C. E., Dubber, C., & Blauw, A. D. (1982). Routines in mother — child interaction. In Feagans, L., and Farran, D. C. (Eds.), *The language of children reared in poverty*. New York: Academic

Press, 53-72.

泰羅雅登 (2009). 読み聞かせは心の脳に届く. くもん出版.

高木和子・小林幸子・田代康子・沢田瑞也 (1974). 絵本の読み聞かせに関する研究(1): くり返し読み聞かせによる分析. 読書科学, 18, 105-113.

手塚久美子・秋庭美智子・安藤智恵子・岩原陽子・小池栄子・中村悦子 (1981). 就学前教育における教材の研究(3): 絵本の構造分析. 第34回日本教育学会発表論文集, 498-499.

辰野俊子・斎藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子 (1981). 言語行動の発達Ⅳ: 絵本場面の母子相互作用における指差し行動. 東京大学教育学部紀要, 21, 77-88.

Thorndyke, P. W. (1977). Cognitive structures in comprehension of narrative discourse. *Cognitive Psychology*, 9, 77-110.

Vygotsky, L. S. (1987). The instrumental method in psychology. In Wertsch J. V. (Ed), *The concept of activity in soviet psychology*. 柴田義松ほか訳 (1987). 心理学における道具主義的方法. 「心理学の危機—歴史的意味と方法論の研究」. 明治図書.

山口茂善・寺山和枝・小坂圭子 (1995). 3歳児の絵本の好みに関する縦断的研究. 岡山大学教育学部研究集録, 98, 1-12.

山鳥重 (1998). ヒトはなぜことばを使えるか—脳と心のふしぎ—, 講談社現代新書.